

旭日、遙かなり4

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

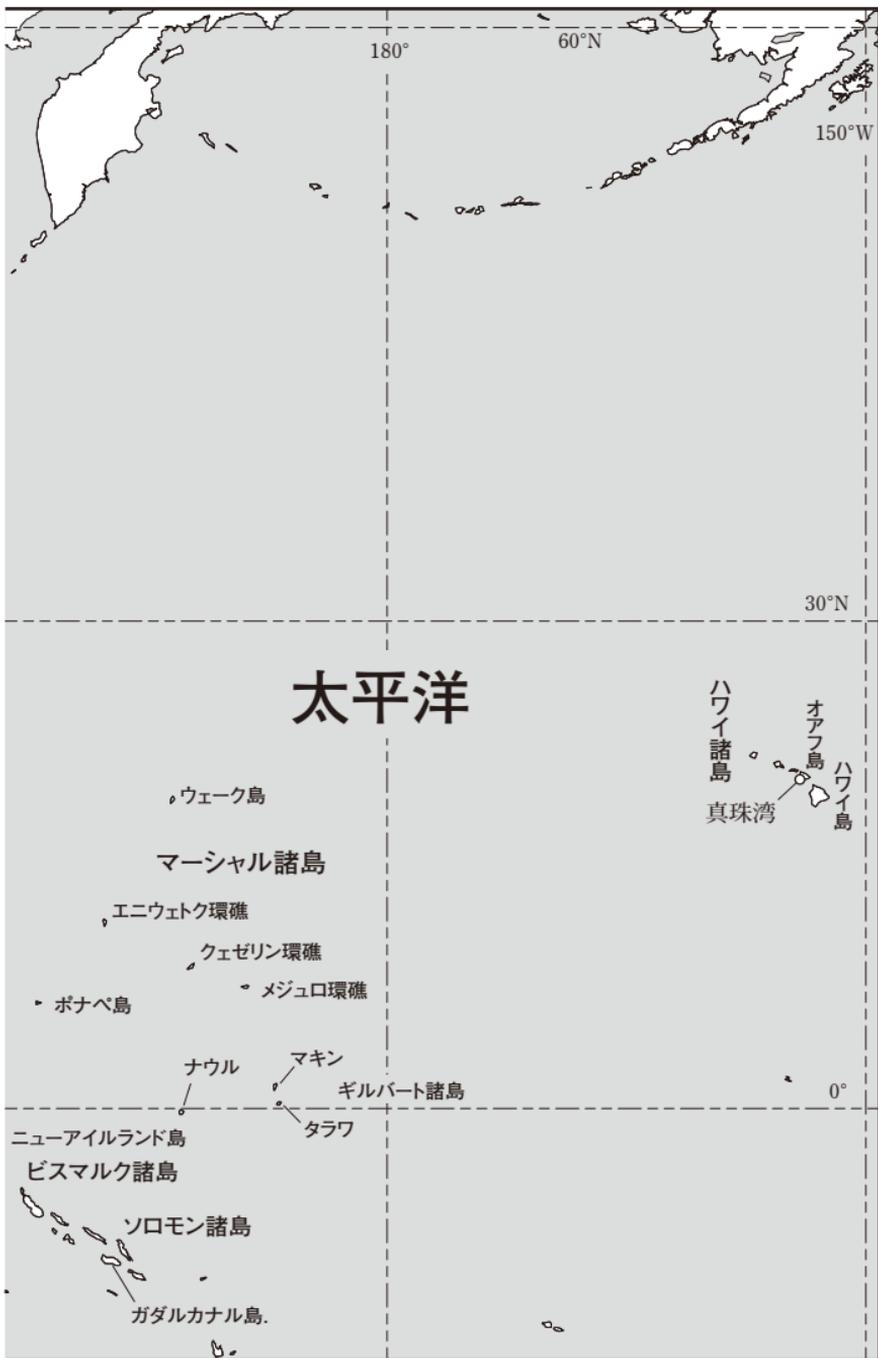
ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之
地 図 ・ 図 版 安達裕章
編 集 協 力 らいとすたつふ

目次

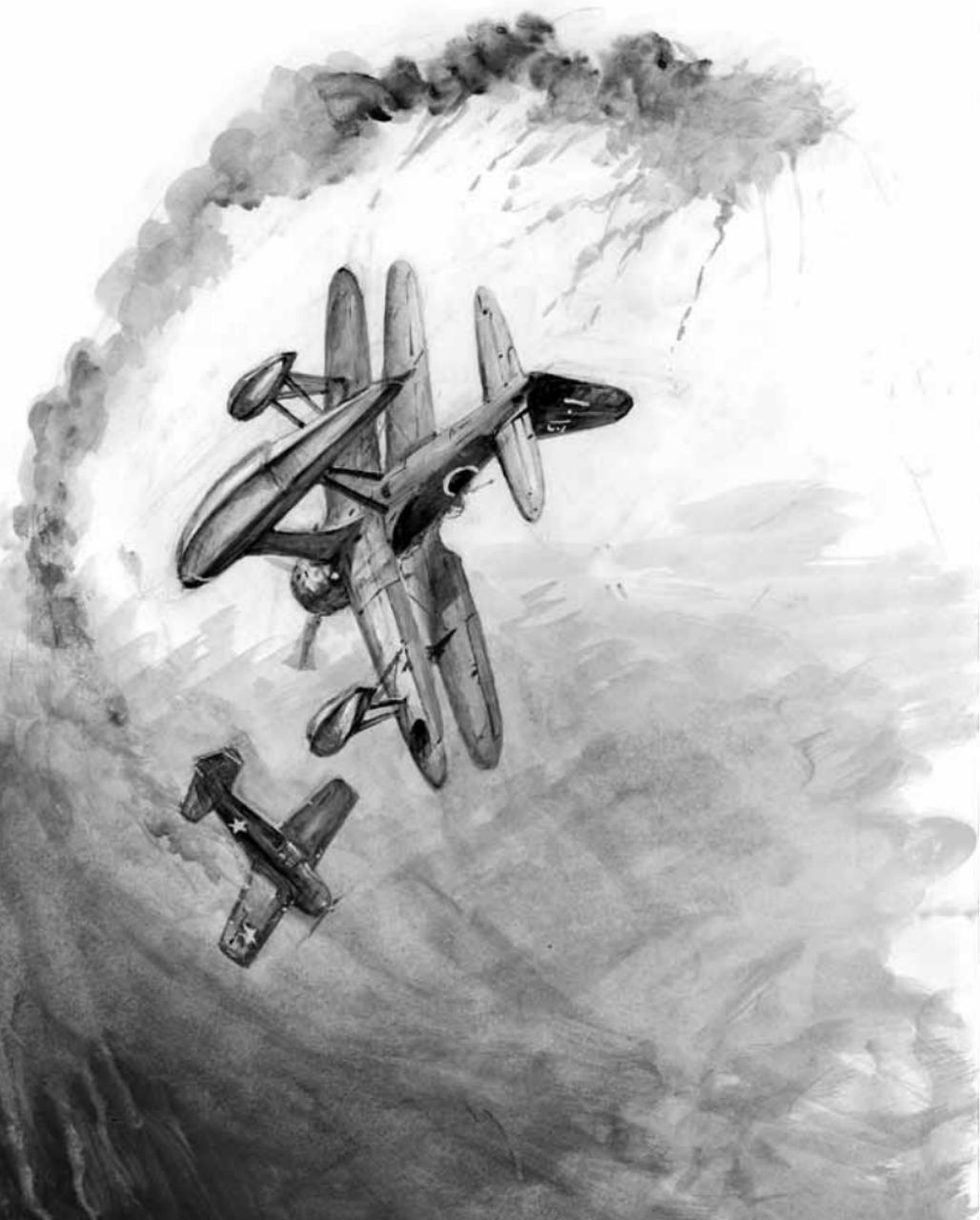
第一章	大艇、西へ飛ぶ	9
第二章	真珠湾の埋火 <small>うずみび</small>	27
第三章	鋼鉄の環	53
第四章	空母跳梁 <small>ちようりょう</small>	101
第五章	タラワ沖の激突	143
第六章	急襲	233



西部太平洋要図



旭日、遥かなり 4



第一章 大艇、西へ飛ぶ

1

「海上を飛んでいるのと、あまり変わらん」

日本帝国海軍少佐鯉沼凜太郎は、眼下の光景にそんな感想を抱いた。

帝国海軍第一九航空隊に所属する三機の二式大型飛行艇が、バイカル湖東岸のウスチーバルグジンを離水したのは、日本時間の五月一日午前四時二〇分（現地時間午前二時二〇分）。

夜明けの二時間前だ。

離水後、既に四時間が経過し、夜はとうに明けている。

陽光は、機体の左後方から差し込んで来る。

地上の風景は、単調そのものだ。

前方にも、左右にも、緑に覆われたシベリアの大地が、どこまでも続いている。

広漠たる大海原の青が大地を覆う緑に変わり、波

のうねりが地上の起伏になっただけだ。

川や沼、溶け残っている雪も視界に入るが、それらはすぐに後方へと消え去ってゆく。

緑の大海にも似たシベリアの上空を、三機の二式大艇は、三菱「火星」二二型エンジン二基の爆音を轟かせながら、盟邦ドイツの占領下にあるモスクワを指して飛行する。

高度計の針は五〇〇メートルを指し、速度計は一五〇ノット（時速約二八〇キロ）を示している。

偏西風に抗いながら、空中の鯨を思わせる巨大な機体は、ただひたすら飛び続ける。

ソ連軍の戦闘機が、行く手を遮ることはない。

人跡稀なシベリアの上空を飛行しているというところもあるだろうが、ソ連軍も、たかだか三機の侵入機に構っている余裕はないのかもしれない。

「隊長、そろそろ交替しますか？」

副操縦員の大下明兵曹長が声をかけた。

二式大艇の搭乗員は、機長の他、操縦員、偵察員、

搭乗整備員、電信員、射手が正副二名ずつ、計一名だが、今回は主操縦員が機長を兼任している。

他には、地上整備員が一名ずつだ。

彼らはドイツ到着後、現地に残り、今後の日独連絡機の整備に当たることになっている。

日独連絡機の飛行距離は、ソ連軍の目を避けて迂回空路を取るため、約三〇〇〇哩に及ぶ。

帝国海軍の航空機の中でも、随一の航続性能を持つ二式大艇にとっても、燃料に不安が残る。

本来は一名が搭乗するところを一〇名としたのは、少しでも重量を軽くし、燃料を節約するためだった。

「もうちょい行けそうだ。あと一時間ほど経ったら代わってくれ」

「一時間後に交替します」

鯉沼の指示に、大下は復唱を返した。

「現在位置はどのあたりだ？」

「ウスチーバルグジンよりの方位三〇〇度、六〇〇

哩地点を過ぎたあたりです」

鯉沼の問いに、副偵察員の飯田佑兵曹長が答えた。

水兵から搭乗員に轉身した、丙飛出身のベテランだ。偵察員一筋の道を歩み、航法は帝国海軍でもトップクラスの腕を持つ。副偵察員だが、技量は主偵察員牟田澄生大尉より上だ。

三〇〇〇哩もの長距離飛行となれば、航法が何より重要となるため、大艇三機の副偵察員には、他の任務であれば主偵察員が務まる者ばかりが配属されていた。

「先は長いな」

鯉沼は呟いた。

発進してから四時間。飛行距離は六〇〇哩。

母艦航空隊や基地航空隊であれば、一度の作戦における往復の飛行距離に匹敵するが、今回の任務では、まだ往路の二割を飛んだだけだ。

先に待ち構える航程の長さを思い、鯉沼は顎を引

き締めた。

「二、三番機はどうだ？」

「定位置に付いています」

鯉沼の問いに、牟田が即答した。

二番機の機長は長谷川潤三大尉、三番機の機長は木山平五郎特務少尉。

いずれも大型機の操縦に経験を積んだベテランだ。

二機の二式大艇は、一番機に追隨し、帝国海軍の軍用機が初めて飛ぶ未知の空域を飛行している。

頼むぞ、長谷川、木山——と、二人の部下に胸中で呼びかけた。

一、二番機にはドイツに引き渡す二式大艇の技術資料が積まれており、三番機はドイツに納入する予定の機体だ。

一、二番機はモスクワ到着後、ドイツから提供を受ける技術資料と、日本に派遣されるドイツ人技術者を乗せて帰路に就く。

一機たりとも、欠かすことはできないのだ。

指揮官としては、僚機が落伍せぬよう常時気を配りつつ、誘導に努めねばならない。

航空時計が午前九時三〇分を指したところで、

「隊長、操縦交替します」

「頼む」

鯉沼は大下の申し出を受け、操縦を副操縦員に委ねた。

「少しお休みになって下さい」

「そうさせて貰う」

大下の言葉に、鯉沼は頷いた。

「皆も、交替で休め。先は長いんだ。適度に休憩を取らないと、身体が保たんぞ」

他の八名の搭乗員にも声をかけ、自身はキャピンの後部に身体を運ぶ。

途中、二、三番機が定位置に付いていることを確認する。

眼下の光景には、依然変化がない。広漠たるシベリアの大地が、どこまでも広がっている。

地上に動くものは、まったく見えなない。

この国の西と東で激しい戦闘が繰り広げられていることが、信じられないほどだった。

静寂せいじやくに包まれたシベリアの上空を、三機の二式大艇は、西へと飛び続ける。

休息用ベンチに座ったまま、二時間ほど仮眠を取ったところで、鯉沼は大下と交替した。

「ウスチーバルグジンより九〇〇哩」

鯉沼が再び主操縦員席に座ったところで、航法のチャートを記録している飯田兵曹長が報告した。

副電信員を務める佐瀬友昭させともあき二等飛行兵曹が、オルジス信号灯を点滅させて、二、三番機に現在位置を報しらせる。

ドイツの支配領域に入るまでは、無線は厳禁だ。

広大なシベリアの直中ただなかで微弱力電波を発信しても、ソ連軍に傍受ぼうじゆされる可能性は小さいが、万一ということがある。

今回の作戦は、同盟国間の空路による連絡の可否

を判定するための試金石しきんせきだ。

成功させるためには、どれほど小さなものであっても、危険を冒すおかことはできなかった。

飛び続けるうちに、太陽が機体を追い越し、陽光が前方から差し込み始める。

鯉沼と大下は、陽光に目をやられぬよう、色付きの飛行眼鏡をかける。

地上の変化は、依然乏しい。

翼下に見えるものは、緑の森と原野、湿地帯、それらの間を流れる川だけだ。

たまに集落らしいものも視界に入るが、それらはすぐコクピットの死角に消える。

ソ連軍に通報されるのでは——との懸念けんねんはあるが、高度五〇〇メートルを飛ぶ機体の国籍マークは、

地上からは視認できないはずだ。

目撃した人々が友軍機だと思ってくれるよう、折る以外にない。

ウスチーバルグジンからの距離が一五〇〇哩を超

えた直後から、偵察員の報告が、

「モスクワまで一五〇〇哩」

に切り替わった。

日独連絡機は、往路の半分をこなしたのだ。

「燃料、どうか？」

「まだ六割以上残っています」

「エンジンは何？」

「全て快調！」

鯉沼の問いに、大下と搭乗整備員の谷川勇中尉が返答する。

往路の半分は平穩だったが、この先は、これまで
 のようには行かない。

目的地のモスクワは、独ソ両軍が対峙する最前線だ。そのモスクワに接近すれば、必然的にソ連軍に発見される確率が高くなる。

——日本時間の一八時四八分（現地時間一四時四八分）、

「前方に山地。ウラル山脈と思われれます！」

大下が叫んだ。

鯉沼は身を乗り出し、前下方を見下ろした。

上空から見た限りでは、さほど高い山々ではない。山脈と呼ぶより、丘陵の連なりのように見える。

飛行訓練の際に上空を飛んだ日本アルプス——標高二〇〇〇メートルから三〇〇〇メートル級の峰が連なる内地の山岳地帯の方が、遥かに高く、峻険に感じられる。

そのウラルの上空を、三機の二式大艇は、爆音を轟かせながら通過する。

「ここから欧州ですね」

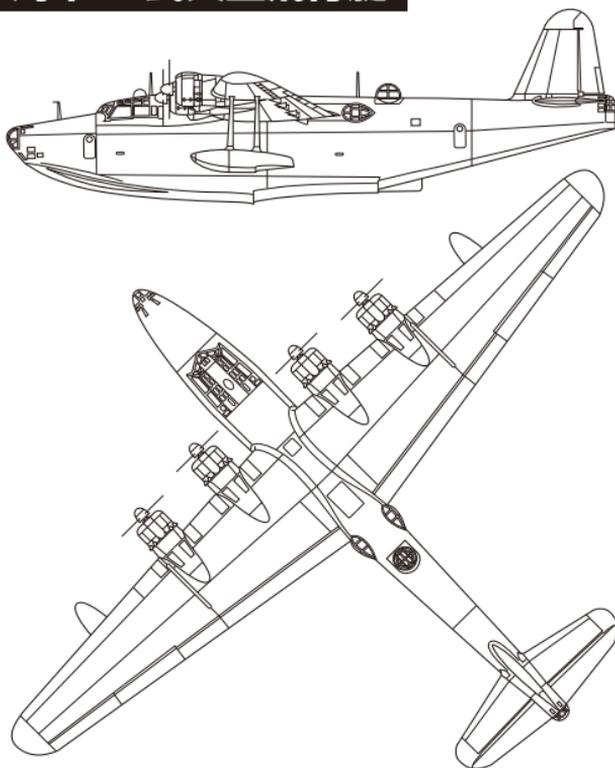
牟田が声を弾ませた。

帝国海軍の搭乗員に、空路でアジアと欧州の境界を越えた経験を持つ者はほとんどいない。

貴重な経験に、興奮を隠し切れないようだ。

「隊長、飛行計画では、ウラル通過は一九〇〇から二〇〇〇の間となっています。概ね順調に飛行していると判断できます」

日本海軍 二式大型飛行艇



全長	28.1m
翼幅	38.0m
全備重量	24,500kg
発動機	三菱 火星22型 1,850馬力
最大速度	455km/時
兵装	20mm機銃×1丁(機首)、20mm機銃×1丁(尾部) 20mm機銃×2丁(両側方銃座) 爆弾 最大2トン または 航空魚雷×2本
乗員数	11名

ワシントン軍縮条約下、仮想敵である米国艦隊に「軍艦によらず」対抗する手段として考えられた方策のひとつが、大型陸上攻撃機による雷爆撃であった。しかし、南洋諸島に大型機が運用できる航空基地を整備するのは困難であり、次善の策として大型飛行艇による攻撃が考えられた。

九七式飛行艇で実績を積んでいた川西飛行機は、海軍の厳しい要求に苦しみつつも、当時の水準を大きく超える機体を完成させた。

本機は、強力な武装もさることながら、長大な航続距離を生かし、島嶼間の連絡任務や長距離索敵にも重用されている。緊迫度を高める太平洋戦線にあって、本機の担う役割はますます重くなっている。

飯田の報告を受け、太下が言った。

「日があるうちに、モスクワに着けますね」

順当に行けば、モスクワ到着は日本時間の五月

二日午前〇時から一時の間となる。

現地では、一七時から一八時の間だ。

出発前に知らされた情報では、モスクワの日没は現地時間の一九時過ぎであるから、日没前には到着できる計算だ。

「正念場は、ここからだぞ」

浮かれている場合ではない——その意を込め、鯉沼は言った。

ウラル以西には、中規模以上の都市が多い。

西に向かう大型機の編隊が地上から視認され、ソ連軍に通報される危険は大きいのだ。

「高度を七〇（七〇〇〇メートル）に上げる」

「二、三番機に信号。『高度七〇。我二続ケ』」

鯉沼は宣言するように言い、主電信員の三浦信彦一等飛行兵曹に命じた。

ソ連の軍用機は陸軍部隊の支援が主任務であり、高高度性能はさほど高くない。

ソ連軍が戦闘機を出撃させても、高高度を飛行すれば、捕捉される危険は小さいはずだ。

鯉沼は、操縦桿を手前に引いた。

二式大艇が機首を僅かに上向け、全長二八・一メートル、全幅三八メートル、全備重量二四・五トンの巨体が、ゆつくりと上昇を開始した。

「二、三番機、上昇開始。本機に追隨して来ます」
三浦が僚機の動きを確認し、報告を上げる。

「発動機、どうか？」

「異常ありません！」

鯉沼の問いに、谷川が即答する。

高度が上がれば空気が薄くなり、エンジンも調子を落とすものだが、二式大艇が装備する三菱「火星」

二二型エンジンは、快調に爆音を轟かせている。

「初の日独連絡機を成功させたとなれば、私たちも整備員仲間に鼻が高いですよ」

第一九航空隊の整備長を務める安中春雄特務中尉は、笑いながらそう言ったが、整備員たちは三〇〇〇哩もの長距離飛行をこなすため、常にも増して入念に整備を行ってくれたのだろう。

(帰還したら、整備の連中には一杯奢らんとな)

そんなことを考えながら、鯉沼は機体の動きに身を任せた。

「総員、戦闘配置。二、三番機にも、戦闘配置を伝えろ」

三〇分余りをかけて、高度七〇〇〇メートルまで上昇したところで、鯉沼は全員に命じた。

二名の射手のうち、森田繁一等飛行兵曹は機首室に入り、機首の二〇ミリ旋回機銃座を受け持つ。

もう一人の本田哲雄一等飛行兵曹は最後尾で、尾部の二〇ミリ機銃を担当する。

副偵察員の飯田と副電信員の佐瀬は、二〇ミリ側方機銃座に取り付く。

二、三番機の機内でも、同様の動きが起きている

はずだ。

ウラルを越えて欧州上空に入った三機の二式大艇は、急速に戦闘準備を整えてゆく。

地上の風景も変わっている。

建造物が多数、視界に入り始めているのだ。

欧州に入ったため、都市や農村が増えているのだらう。

——危惧したようなことは、すぐには起こらなかった。

地上からの対空砲火も、戦闘機の出現もない。

三機の二式大艇は、何物にも遮られることなく、モスクワへの飛行を続けている。

「モスクワまで一五〇哩」

日本時間の二三時一分(現地時間一六時一分)、主偵察員の牟田が報告した。

この時点で、操縦は鯉沼の手に移っている。

途中、大下と何度か交代したが、目的地までは一時間だ。

最後の詰めは、自分自身でやりたかった。

「高度を落とす。二、三番機に『高度五〇』と送信しろ」

鯉沼が命じたとき、

「左下方、敵機！」

副操縦員席の大下が、緊張した声で叫んだ。

「送信待て。高度、このまま！」

鯉沼は、咄嗟に下令した。

身体がこわばり、口の中が干上がるのを感じた。

「まさしく、一〇〇里の道を行く者は、だな」

顎を引き締めながら、鯉沼は呟いた。

バイカル湖畔のウスチ＝バルグジンから、約三〇

〇〇哩。

実戦では例を見ない超長距離飛行に挑んだ三機の二式大艇は、長い旅路が終わらんとするときにあって、恐れていた最大の敵——ソ連軍の戦闘機と遭遇したのだ。

「二、三番機に送信。『我ニ続ケ』」

「増速する！」

鯉沼は主電信員の三浦に命じ、次いで宣言するよう叫んだ。

エンジン・スロットルを開き、加速を開始する。

エンジンの唸りが高まり、風切り音が拡大する。

何分にも重い四発の飛行艇だけに、加速は鈍い。

敵機に追われている身としてはもどかしい限りだが、如何ともし難い。

敵機は、すぐには攻撃して来なかった。

「敵戦闘機、追いついて来られません！」

「狙い通りだ！」

牟田の報告を受け、鯉沼は小さく叫んだ。

戦闘機であれ、爆撃機であれ、高度が上がるほどエンジンは息をつき、速度性能、上昇性能共に低下する。

ソ連軍の戦闘機も、七〇〇〇メートルの高度では二式大艇を捕捉できないのだ。

「このまま行くぞ！」

鯉沼は、宣言するように叫んだ。

目的地のモスクワまでは、一五〇哩を切っている。巡航速度で飛んでも、一時間かからない。

その間、ソ連機の攻撃を凌ぐことができれば、作戦は成功だ。

三機の二式大艇は、七〇〇〇メートルの高度を保ったまま、ソ連機を振り切ろうと試みる。

大気の薄い高空を飛行しているため、最大時速の四五五キロは發揮できないが、速度計の針は二〇〇ノット（時速三七〇キロ）前後を指している。

ソ連機も上昇して来るが、動きは鈍い。

水平面での最高速度は二式大艇を大きく上回るはずだが、なかなか同高度に到達できないようだ。

「敵機との高度差〇六（六〇〇メートル）！」
牟田が報告する。

「敵機が近づいたらぶっ放せ」
鯉沼は、各員に命じた。

日本とソ連は交戦状態にはないが、三機の二式大

艇はロシア帝国空軍のマークを付けている。

鯉沼たちの身分も、表向きはロシア帝国空軍の軍人ということになっている。

交戦国である以上、遠慮は要らない。何よりもソ連機を墜とさなければ、こちらが撃墜されるのだ。

ソ連機は、じりじりと距離を詰めて来る。

「高度差〇四……〇三……」
牟田が、緊張した声で報告する。

「〇二！」
の報告と共に、機銃の連射音が届いた。

左側方機銃座を担当する佐瀬が、ソ連機に一連射を浴びせたのだ。

旋回機銃座は、戦闘機の固定機銃に比べて命中率は劣るが、こちらは上から下に向かって射撃できるという有利な態勢にある。

「墜としたか？」
外しました。敵機は一旦離脱！」

鯉沼の問いに、無念そうな答が返された。

ソ連機の動きは、想像がつく。機体を翻ひるがえして降下し、二〇ミリ弾の火箭かせんをかわしたのだ。

「二、三番機、どうか?」

「両機とも健在です!」

鯉沼の問いに、即座に応答が返される。

長谷川大尉の二番機も、木山特務少尉の三番機も、

ソ連機に接近を許していない。

敵機が上昇し、距離を詰めて来れば、五箇所に装備されている旋回機銃が火を噴ふき、直径二〇ミリの射弾たを叩き込む。

必ずしも撃墜する必要はない。作戦目的は、モスクワへの到達なのだ。

「敵機、上昇して来ます。高度差〇六!」

今度は、右側方機銃座を守る飯田が報告する。

距離はじりじりと詰まるが、高度差が二〇〇メートルになったところで、再び二〇ミリ機銃の重々おもおもしい連射音が鯉沼の耳に届く。

今度も、撃墜の報告はない。

ソ連機は機体を降下させ、二〇ミリ弾の火箭くうに空を切らせている。

「モスクワまで一〇〇哩!」

今度は、牟田が報告する。

ソ連機と交戦している間に、五〇哩を移動したよ
うだ。

「まずいぞ、こいつは……」

鯉沼は、部隊が容易ならぬ状況に置かれていることに気がついた。

モスクワに降りるためには高度を下げなければならぬが、二式大艇の下方にはソ連機が網あみを張っている。

迂闊うかつに降下するわけにはいかない。

「敵二機、左下方より接近。高度差〇二!」

「敵一機、右下方より接近。高度差〇二!」

佐瀬と飯田の報告が、前後して飛び込む。

ほとんど同時に、左右両側面の旋回機銃が火を噴

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。